おうい

まがりまめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おういい

【Ｎコード】
Ｎ９６７５Ｐ

【作者名】
まがりまめ

【あらすじ】
図書館から聞こえてきた「おういい」という謎の呼び声。
図書委員の六角はその奇妙な声と放課後の奇妙な関係を始めるが・・・

01

「おうい」

放課後。大半の生徒も帰ってしまい、誰もいなくなったはずの図書室の奥から、男の呼ぶ声がした。一瞬、先生かなと思ったけれど、彼は先ほど自分に鍵を渡して閉めておくようにとだけ言い残し帰ったはずだった。空耳だったのだろうか、そう思い本棚の電気をパチパチと消していくと。

「おうい」

確かに、また声がした。

「誰か残ってるなら、早く出てください。もう閉館です」

下級生がふざけているのだろうかとため息交じりにそう声をかけると、

「おうい」

と、同じ声色がまた響く。全く、こっちはもう帰りたいのに、そんな思いで消した電源をまたつけ、本棚のほうへと足を向けた。

「もう六時ですよ、出てください」

普段では絶対に床を踏みならして歩きなどしないが、わざとカーペットのひいてある床をドスドスと音をたてるように歩く。自分は不機嫌なのだ、そんな主張をしたくて。

「おうい」

ふざけるのも大概にしてほしいと、四回目の呼び声にしてすでにイライラは頂点に達しようとしていた。一階の本棚には、どうやらいないようだ。二階へと上がるスロープをのぼりながら、もしかしたら同級生の犯行かと思い直しはじめる。この手のいたずらが好きそうな奴らの顔がちらほらとうかんだが

「おうい」

この声はその中の誰でもない。

「借りる本があるならさっさと借りて出てください」

自分の声がむなしく図書室に響き渡る。まさか、この声が相手に聞こえていない事はあるまい。
「おうい」
しかし、男の声色は変わらない。まるで機械で何回も再生しているような声だ。テープの巻き戻し音でも聞こえやしないかと、じっと耳を澄ましてみる。
「おうい」
しかしそれらしい物音はまったくしないで、次の「おうい」が聞こえた。
「鍵、閉めますよ」
二階の棚を最後まで覗いたが、人影は全くない。あと見ていないとしたら、鍵のかかっている書庫だけだ。スロープをおり、書庫の前まで歩いて行くとその間定期的に聞こえていた「おうい」が止んでしまった。
「中に誰かいるんですか」
手に持っている鍵の束には書庫の鍵もあるはずだ。しかし、十個以上連なっているその中の、どれかまでは知らない。
「いるならふざけないで出てきてください」
ドアノブを回してみたが、鍵はしっかりとかかっている。確か、ここのドアは内側から鍵を開閉できたはずだから、閉じ込められたというわけではないだろう。
「図書室、閉めますよ」
軽く舌打ちして返事を待ったが、一分たっても先ほどの声はしなかった。
「本当に閉じ込めますよ、知りませんからね」
吐き捨てるように言い、くるりと踵をかえすと、俺は出口へと向かう。扉の横の電気のスイッチを一気に消して、扉をくぐろうとしたその時。
「おうい」
また、声がした。ちらりと手元の鍵を見て、ため息をつく。この

タイプならば、内側からあけることができる。
「ここ、閉めるけど内側から開くみたいだから、自分で何とかしろよ」
「おうい」
最後の声を無視してガチャガチャと鍵を閉めた。もし彼がこの後出てきて鍵が開いてしまっても、俺が明日早く学校へ来て鍵をかければ先生にはばれないだろう。
「（全く変な野郎だ）」
何が楽しいんだか。ふうと大きくため息をついて、ぐるんと首を一回転させると、俺はそのまま下足箱へと駆け下りていった。

翌朝、図書室の鍵は開いていなかった。どうやらかれは一晩この中で過ごしたらしい。もしくは、鍵をもっていたか。前者だと、中で干からびていないかと少し心配したが、それでも自業自得だ。けれども流石に図書室から死体が発見されたら後味が悪いので、のぞいてみることにした。
「おはようございまーす」
鍵を差し込み扉を押すと、昨日と同じでしんと静まり返っている。鞄をおいてまっすぐ書庫の前に行き、
「おはようございます」
とやや大きめの声をだしてみた。数秒待ったが、返事はない。
「（閉まってら）」
ドアノブに手をかけてみると、どうやら鍵はしっかりとかかっているようだ。昨日の男は図書室の鍵以外に書庫の鍵も持っていたらしい。
「（いや、待て、ずっと出てないのかも）」
それこそ中で声も出せないほど衰弱していたとしたら。ほとんどありえないと思いつつも鍵の束から一本ずつ、合うものを探していった。六本目にしてやっと開き、ドアノブを回す。
「大丈夫ですかー」

棚には乱雑に本が積み重ねられ、端のほうの床にも小高く山ができている。生徒が普段利用できる棚とは大違いだなと思いつつも、天井のやや低い中を歩いたが、四つの棚の間に人の影はなかった。
どうやら本当にからかわれたらしい。そう思うとにわかに腹がたってきて、荒々しく書庫の鍵を閉めると、俺は出口に向かった。鞄をひろい、再び図書室に鍵をかける。普通の生徒は図書室、ましてや書庫の鍵なんて持っていない。そう言えば、この前先生が二つ鍵が無くなったとぼやいていたから、誰かがいたずらのつもりで盗んだのだろうか。
「（ここを拠点に、肝試しでもしたのかな）」
からかわれたが、どうも気に食わなかった。

「返却日は三十日です」
はい、と下級生に本を手渡すと「ありがとうございます」と軽く頭を下げられ図書室からでていった。五時五十七分、今日もそろそろ閉館の時間だ。先生は二十分ほど前にまた俺に鍵を手渡して帰ってしまった。本当、人使いが荒い。
「そろそろ閉館の時間でーす」
少し大きい声をだせば、ここでは十分に響き渡る。俺の声を合図に、棚の間から数人の生徒が本を片手に出てきた。だいたいこの時間まで図書室に残っている顔ぶれはいつも一緒だから、クラスと番号を覚えてしまっている。貸出カウンターに戻り一足早く四枚の貸し出し用カードをテーブルの上に出しておいた。
自分も机の上に広げていた宿題を片付けてから、生徒が残っていないか確認をしに棚の間を見て回ることにする。普段はこんな面倒な事はしないのだが、昨日のような事態になってほしくはない。一階、二階と見て回り書庫の中も確認すると一人満足してうなずき、カウンターに戻った。カウンターではまだ二人がカードを書いていて、俺はその前の椅子に腰を下ろす。書庫にも棚の間にも、生徒はいなかった。目の前の二人が出て行けば俺以外の人間はいなくなる。

「さようなら」
貸し出し手続きをおえたカードをそれぞれ提出し、二人は扉をでていった。その背中を見送り、図書日誌でもつけようかと引出しからファイルをとりだした、その時。
「おうい」
また、声がした。空耳かと思い無視してファイルを開いて綴じられているプリントに今日の日付を記入していく。貸出人数まで書いたところで再び、
「おうい」
と聞こえた。間違いない、今のははっきりと聞き取れた。
「もう閉館って言ったじゃないですか」
立ち上がるのも面倒で、座ったまま声をはりあげる。コメントの欄に何を書こうかと考えていると、また、
「おうい」
と一言。そうだ、どうせならこの声の事をここに書いてやろうか、そう思いついたがばれたら彼にとってまずいだろうと思い、やめておいた。代わりに、今日は本を借りていった人数が多かった、と書いた。
「また鍵閉めますよ」
ファイルをもとの場所に戻し、立ち上がる。鍵の束で右手左手とキャッチボールをしながら、さてどうしたものかと踏み出しかけた足をとめた。
「おうい」
「からかってるんですかー」
とりあえず、帰り支度を全て整える事にしよう。椅子にかけていたコートを着て、カバンを出口まで持っていく。
「おうい」
「からかってるんならもう出ますよー」
先ほど、棚の間を確認したはずなのだが。ざっと見て回っただけだから、見落としてしまったのかもしれない。

「（棚の上に登って、隠れようと思ったら出来るよな）」
わざわざそんな事をする奴がいるなんて、にわかに信じがたいが。
「おうい」
けれど、声がするという事は誰かがいるということだ。
「俺もうでますよ」
「おうい」
「鍵一応閉めますけど、この後出るなら昨日と同じように鍵閉めといてくださいね」
彼が鍵を持っているらしいというのが唯一の救いだった。安心して、帰宅できる。
「おうい」
「さようならー」
カチリと鍵を閉め、鍵の束をポケットにつっこむと暗闇の中を歩きだした。
「（二日も連続で肝試しはおかしいよなあ）」
家出でもしたのだろうか。友達の家に泊めてもらえなかったから、仕方なく学校に泊まっているとか。
「（だったら呼ばねえよな）」
ひっそりと息を殺して人が出て行くのを待つ、俺だったら絶対そうする。
「（もしかして、不審者？）」
何か盗られた、とかいう情報は聞いていない。しかし、もし不審者だったのなら、先生に伝えておくのが得策だろう。
俺は下足箱に向けていた足をくるりと方向転換し、職員室に向かった。廊下や教室にもう電気はついていなかったが、職員室では明々と蛍光灯が灯され、窓からは中でせっせと働く先生たちの姿が見て取れた。
「失礼します」
扉をノックし、足を踏み入れると出ようとしていた先生とぶつかりそうになり、思わず後方へ飛び退く。

「おう、六角まだ残ってたのか」
「竹田先生」
帰ったはずじゃなかったのか。昨日今日と、俺に図書室の仕事をまかせておいて、ここにいるなら図書室にいても良いはずなのに。
「鍵返却か、御苦労さん」
はい、と差し出された竹田の手を無視し、俺はなるべく小声で、
「先生、何か図書室に不審者がいるみたいなんですけど」
と告げた。
「不審者？」
「はい。昨日・・・からなんですけど、『おうい』って声がするんですよ。それで、棚の間とか見て回ったけど、姿が見えなくて。聞き間違いかと思って昨日はほっておいたんですが、やっぱり今日も聞こえたから気になって」
いくつかの事柄は伏せておく。人がいると確信しているのに鍵を閉めたと知れたらきっとまずいだろうから。先生は俺の話を真剣に聞いていたかと思うと、予想に反してにやりと大きな笑みをうかべた。
「ほー、六角もきいたかぁ」
「は？」
「その不審者、俺も知ってるよ」
「なら何で対処しないんですか？」
「うーん、俺の知ってるかぎりでかれこれ九年はあそこにいるかなあ」
「九年？・・・それって」
まさか、その可能性は微塵も考えていなかったのに。
「うん、幽霊だろうね」
竹田のけろりとした言葉にすこし面喰ってしまった。肝試しではなかったのだ。むしろ、俺の肝っ玉が試されていたようで。
「どうにかしないんですか？」
あまりその類のものは信じないようにしているけれど、実際いる

となるとやはり気味が悪い。
「ははは、どうにかできるかねえ」
「御経あげるとか」
「ここはキリスト教学校だぞ。せめて祈りにしとけ、祈りに」
どうやら竹田はどうするつもりもないらしい。陽気に笑う白髪頭を見ていると、何故だかこちらまでも「まあ良いか」という気分になってくる。
「姿とか、見えるんですか？」
「俺は見たことないが」
「声だけか」
姿が現れてもきっと怖いだろうけど、声だけとなるとそれも場所が特定できないから気持ちが悪い。
「うん、でも聞こえる奴と聞こえん奴がいるみたいだぞ」
「聞こえる奴と聞こえん奴？」
「お前を入れて今までに俺にそのことを言ってきた生徒は九年間に二人だけだ」
「二人？九年間で？」
少ない、素直にそう思った。
「六角が気味悪いって言うなら放課後当番誰かに代わってもらえ」
「あ、いえ、大丈夫です」
気味が悪いが、おそらく害はないのだろう。話しかけても「おうい」しか繰り返さなかったし。先生に「さようなら」と言い小さく礼をしてから、俺は職員室から退室した。廊下の暗闇に幽霊の気配がしないかと、少しびくびくしながら。

02

「おうい」

声が聞こえた瞬間、思わず肩がはねた。図書室利用者の最後の一人が出ていくと同時に部屋を出ようか、それともう一度、確かにあの声が聞こえるかどうか確かめようかと悩んでいる内に、はじまってしまったのだ。

思わずきょろきょろと周囲を見回してしまう。先ほど自分で電気を消し、真っ暗になった棚が目に入り、気味が悪かった。

「おうい」

今日もどうやら規則正しく「おうい」を繰り返すらしい。闇の中から響いてくる声は不気味としか形容できない。それなのに自分は、昨日まで平気で一人棚の間を見て回っていたのだ。そんな事、今じゃとても無理。

「あ」

気づけば、椅子に腰かけている脚が震えていた。どうしよう、怖くて動けそうにない。扉までは約六歩、これを歩ききれば出ることができる。しかし棚のほうに背を向けたくない。

「おうい」

俺の葛藤をよそに、声は同じトーンで繰り返される。

「勘弁してくれよ・・・・」

日誌も書いた、帰る用意もした、あとは扉の外へと出るだけなのに。溜息をつきかけたその時、いきなり扉が力強く開いた。

「よう、六角・・・て、そんなに驚かんでも」

入ってきたのは竹田だった。目を丸くして身を固まらせた俺を見て、軽く笑う。

「せ、先生かぁ・・・！」

人間で良かった。ほっと胸をなでおろし、椅子をひいた。震えている脚を見られたくはない。彼は大股で歩いて、俺の横に座ると、

「聞こえた？」
と楽しそうに訊ねてきた。
「おうい」
そこへタイミングよく、声がする。
「おお、本当だ。いるなあ」
にこにこと笑う竹田を見ていると、だんだんと恐怖は薄れていった。
「先生、どうしたんですか？」
もちろん今日も閉館二十分前に、俺に鍵を渡して図書室を出ていったのだ。それが、戻ってくるなんて。
「いや、六角が怖がってるかなと思って」
「はあ？わざわざそれを見に来られたんですか？」
「いいや、ただそれだったら俺の考えた遊びを教えてやろうと思ってな」
「おうい」
声に邪魔され、返事をしようと開きかけた口をぐ、とつぐむ。
「俺もはじめは怖かったが、これのおかげでずいぶん救われたよ」
「遊びって、一人でやるんですか？」
「いいや、あいつと遊ぶのさ」
「あいつ・・・って、『おうい』？」
「おうい」
「そうそう。次の声がきたらはじめるぞ」
し、と唇に人差し指を押し当て、竹田は楽しそうにほほ笑む。俺もつられ、彼を、見つめた。そして、数秒後。
「おうい」
「ある日森の中、熊さんに出会った、花咲く森の道、熊さんに出会った」
「おうい」
「熊さんの言う事にゃ、お嬢さんお逃げなさい、スタコラサッサッサのサ、スタコラサッサッサッサのサ」

「おうい」
俺は思わず噴き出していた。竹田の歌う「森の熊さん」に間髪よく「おうい」とあいの手が入る。竹田は上機嫌に最後まで歌い終わると、
「なあ、楽しいだろう」
と笑った。
「先生おかしい！うける！」
なおも笑い続ける俺に、先生は「ようし」と言ってさらに二、三曲のレパートリーを披露してくれた。
「どの歌で、どのくらいのテンポでいけばうまくいくか探すんだよ」
「先生、一人で歌ってたんですか？」
「うん。みんなが帰った後にね、あいつと二人で」
「普通あいの手が歌に合わせるのに」
「あはは、なかなかあいつはマイペースだからなぁ」
「合わせてくれないんですね」
「おうい」
「あ、返事したぞ。本人にもどうやら自覚があるらしい」
竹田の言葉に二人して笑うと「さあそろそろ出ようか」と彼は腰をあげた。俺も立ち上がり、出口へと向かう。脚の震えはすっかりどこかへ飛んで行ってしまったらしい。
「おうい」
「じゃあな、ばいばい『おうい』」
「悪さするんじゃないぞ」
竹田のおかげであれにすっかり親近感がわいてしまった。鍵を閉め、束を竹田に手渡すと、
「案外、おもしろいやつだろう」
と言ってくる。俺はうなずき、
「明日から、放課後が楽しみです」
と笑った。

「愛宕の山に入りのぼる月を旅路の友として」
「おうい」
今日は「おうい」が始まるまで、そわそわして待っていた。最後の生徒が出て行って、廊下を歩く足音が完全に消えた所に、早速「おうい」は声を出しはじめ、俺はまっていましたとばかりに歌い始めた。しかし、なかなか難しく、あいの手にぴたりとはまった曲は今のところ鉄道唱歌だけで。竹田はあの三曲を見つけるのにどのぐらいかかったのだろうかとぼんやりと考えた。
「おうい」
だんだんと知っている歌のレパートリーがなくなってきて、歌うのをやめてだまりこむ。「おうい」の間隔は意外と短い。そしてその中に入り込む歌もなかなか少なかった。
「おうい」
「ちょっと待て、今考えてんだから」
この分だと、最近の歌はほぼ無理だと考えてよいだろう。となればやはり童謡か唱歌しかない。
「おうい」
「黙っとけよ、考えてんだ」
無意識のうちに「おうい」に話しかけていた。しかし頭の中は歌のことでいっぱいでそれどころではない。
「おうい」
「はいはい、なんだよ」
このまま歌ではなく受け答えのレパートリーを考えるのも面白いかもしれない、そう思った時。
「聞こえるのか？」
はっきりと、声がした。
「そこに誰かいるんだろう？僕の声が聞こえるのか？」
それは確かに「おうい」の声で。
「は・・・」
再び、固まってしまった。

「聞こえるなら返事をしてくれ」
「おうい」以外の言葉をしゃべるなんて、反則だ。恐怖はなかったが、今までの歌と独り言を聞かれていたかと思うと、急に恥ずかしくなった。
「おうい」
「はい」
思わず返事をしてしまい、気づいた頃には、
「矢張りいた！君は生徒か？」
と声をかけられていた。
「生徒です・・・」
尋ねられたら答えてしまう、俺はどうやらそんな性分の持ち主だったらしい。多少の好奇心も加わっていたのもあり、俺は鍵の束を握りしめ、カウンターから棚のほうへと歩き出した。
「生徒か。生徒に良い思い出はないが、まあ良い。ちょっとこっちへ来てくれ」
「どこですか？」
「どこだろう。とりあえず、暗いよ」
「・・・ちょっと待ってくださいね」
俺は電気のスイッチがある所へ行き、いったん全ての電気を消した。それから一階の棚の電気だけをつけ、
「明るくなりましたか？」
と尋ねた。
「いいや、暗いよ」
「じゃあこっちだとどうですか」
「まだ暗い」
パチパチと、九つのスイッチをつけたり消したりしていく。六つ目のスイッチをオンにした時、
「やあ、明るくなった」
と「おうい」が言った。指の先に触れているスイッチは、書庫のものだ。

「わかりました、行きます」
スイッチをそのままに、まっすぐ書庫へと向かう。この間は本当に何も考えていなくて、ただ鍵を開けなければと束から合う一本を探し出して、扉をあけた。
「どこですか」
「ここだ、ここ」
棚の間を覗いていったが、人の、いや「おうい」の姿は見当たらない。
「何か見えませんか」
「本が見える」
「なんて題名ですか？」
「読めないからわからない」
となれば背表紙から題名がすりきれてしまったような古い本だろうか。が、生憎ここはそんな本ばかりで。片端から探していったら、時間がかかりすぎる。
「じゃあ、今から俺が歩き回るんで見えたら言ってください」
「了解」
書庫の入り口からゆっくりと、歩を進めていく。姿がなくて、声だけの存在だなんて、透明人間みたいだな。もしかしたらいきなり、後ろから襲われるかもしれない。いや、気づかれる心配がないんだから、前からくる可能性もあるな。
頭ではそんな事を考えていたが、体は全く震えてなかった。むしろ何故かリラックスしており、積み上げられた本の山に足をとられてよろめいたりした。
三列目の棚に差し掛かろうとした時、
「見えたぞ！」
と声がした。立ち止まり、周囲を見回す。ちょうど端だったので棚の本に加え、床の上に高く積み上げられていた。俺は右手の棚に向かって立ってから、
「俺今、あなたから見てどっちの方向に向いてますか」

と聞いた。
「右向きで横を向いているね」
右向き、という事は本が積み重ねられた方向に彼がいるという事だ。そちらに向きなおりじっと目を凝らしてみたが、何も見えなかった。
「姿、何も見えませんけど」
いや、幽霊だから見えなくて当たり前なのだろうか、ちらりとそんな事を思っていると突然チャイムの音が鳴り出した。驚いて腕時計を見ると、時刻は六時三十八分、もう完全下校時間を過ぎている。
「まずい！」
そろそろ警備員が校内を巡回し始めるはずだ。つかまったらうるさいと、クラスの奴が言ってたっけ。
「どうした？」
「おういい」がのんびりとした声をだす。
「ごめん、もう俺帰らなくちゃいけない時間なんです」
「ほう、また来るか？」
「明日の同じ時間に、きます」
「ではまたその時に続きを頼もうか」
「あ、はい」
「主人が言っていた。生徒は早く家に帰宅させたほうがよろしいとな。それでは、また明日」
「はい、さようなら」
見えなかったが、とりあえずお辞儀をして書庫から駆け出て鍵を閉め、電気を消し、図書室自体を閉鎖した。今日はもう「おういい」の呼び声はしなかった。
「（ずいぶん紳士的な印象だったな）」
それが少し、おかしかった。

03

「おうい」
「はい、今行きます」
最後の生徒が出て行って五分後、「おうい」からの声がかかった。はやる気持ちをおさえ、書庫に走る。
「やあ、来たか。こんばんは」
昨日と同じ位置に立つと、彼はあいかわらず紳士的な態度で挨拶をしてきた。
「こんばんは」
本の山に向って軽く頭を下げると、変な間があって（おそらく声の出ないリアクションをとっていたのだろう）
「さあ、僕を見つけてくれ」
と言った。俺は思わず頭の上に疑問符をたくさん並べる。
「あの、ここにいるんじゃないんですか？」
見えないけれど。
「いや、実を言うと本にとり憑いているのだ」
「本に？」
なるほど、だから図書室にいるのか。
「どんな本か、わかります？」
「分厚くて大きい本だ」
「おうい」の答えに、ふうと息を吐く。目の前に高く積みあがっている本のほとんどが、分厚くて大きい。
「それじゃあ一冊ずつ持ち上げますから、持ち上がったと思ったら言ってください」
「了解した、すまないな」
「いいえ」
おそらく五十冊はこしているだろう。まあ、内容を確かめていくのではないから、そんなに時間はかからないはずだ。

「君」
「はい」
持ち上げては横へ積み、の機械的な作業をはじめると「おうい」が声をかけてくる。
「名前は？」
「六角敬英です。敬うに、英語の英」
「ほう、なにやら武将のような名前だなあ」
「よくいわれます。あなたは？」
「ああ、これは失敬。先に名乗るのが礼儀だったね。僕の名は香川ルカだ」
「ルカ？外国の方なんですか？」
「母親がね。でも育ちは日本だ」
「へえ、そうなんですか」
日本語がペラペラだったから、てっきり日本人だと思っていた。それにしても、外国人の幽霊がいるだなんて、変な学校だな。教師だったのだろうか。
「あ、六角君、それだよ」
山も半分崩しおえたか、という所で香川さんから声がかかった。
「これですか」
手の中にあるのは、古ぼけた青の表紙の本。確かに分厚くて大きく、ずっしりとした重みが伝わってくる。背には「日本国勢辞典」という金文字がかろうじて残っていた。中を開いてみようとページに手をかけた所、やけて茶色くなったページに、ひときわ茶色く染みがあるのに気づく。軽くそこをなでてみると手にざらつく感じが残った。
「うん、人に触れられたのは何十年ぶりだろうか」
香川さんがなつかしそうな声をだす。俺は染みに手をかけ、ページをめくろうとした。
しかし。
「くっついてる」

パラパラと何十枚ものページどうしがくっついて塊となって指を離れていく。垣間見えるページには、茶色い染みが大きく広がっていた。この染みは、何だろう。コーヒーでもこぼしたのだろうか、いや、それにしてはあまりにページどうしがくっつきすぎてやしないか？それに、触った時の粉っぽい感じ。見ると指先には埃以外の粉が付着している。

「ああ、それかい」

見たかどうかはわからないが、香川さんが俺の疑問に気づいたらしい。再び染みをなでていた俺に、彼は軽い調子で、

「それは血だ。僕の血」

爆弾発言をした。

「血っ！？」

思わず驚いて、本を取り落としそうになる。そんな、他人の血を触ってしまった。というか、血って、この量は多すぎやしないか――・・・

「僕はね、この本で殴られて死んだんだよ」

「えっ・・・」

一瞬意味を呑み込めないで固まってしまった。殴られて死んだって、それって・・・

「おーい、六角、いるかぁ」

と、そこへいきなり竹田の声が響き渡った。ぐんと現実に引き戻され、後ろを振り返る。

「おい六角君、続きは明日にしよう」

早口で香川さんがつぶやいた。

「うん、さようなら」

「うまくやり過ごせよ」

「はい」

香川さんの提案のおかげかどうか、頭の中にはっきりと今から取るべき行動がうかんでくる。俺は本を閉じて空いていた棚の奥につっこむと、制服についた埃をはらい平然とした顔をして書庫の入り

口に向かった。
「竹田先生？」
ひょいと顔をのぞかせると、彼はあともう一歩で書庫に入ってくる所で。
「おお、いた六角」
危なかった、と心の中でほっと一息ついた。
「どうされたんですか？」
「どうされたじゃないぞ、お前。時間見てみろ」
竹田に左手を差し出され、ひょいと腕時計の文字盤をのぞく。
「七時！？」
おかしい、なんでチャイムが鳴らなかったんだ。昨日と同じ時間に鳴ると思っていたのに。
「まったく、一時間も何してたんだ」
あきれたとばかりにため息をつかれる。
「いやあ・・・あの、ちょっと・・・」
とっさに言い訳が思い浮かばず、苦笑いを浮かべると、竹田は再度溜息をつき、
「まさか『おうい』の正体をつきとめようと思ったか？」
と言った。そうだ、その手があった！
「実は・・・」
そうなんです、とでも言いたげにへらりと笑う。そして「ばれたか」のポーズ。すると竹田溜息だけでは足りなかったのか、がっくりと肩をおとし、
「お前は時々馬鹿やってくれるなあ」
としみじみ言われる。俺はそれにまた照れたような笑みをうかべてみせた。今の演技、完璧だ。
「すみません」
「で？」
「はい？」
「見つかったか？奴は」

竹田の眼の奥がきらりと光ったのを、俺は見逃さなかった。なんだ、結局先生でも興味あるんじゃん。
「いや、ここに入ったとたん声が途切れちゃって、駄目でした」
もっともらしく言うと、
「そうかあ」
と竹田も再びがっくりと肩をおとした。
「まあ、今日のところは許してやるから、帰りなさい」
「はい、ごめんなさい」
頭を下げると「ああ、別にいいよ」と竹田が手をふる。俺はいかにも「反省してます」という顔をして素早く書庫の鍵を閉め、「後はやっとく」と言った竹田に鍵の束を渡し、走って図書室を出て行った。
「（ああ、本当にびっくりした）」
竹田の登場にではなく、香川さんの発言に。本で殴られて死んだ外国人教師、何か恨みでもかったのだろうか。
「（あそこに凶器があるって事は・・・もしかして犯人つかまってない・・・とか？）」
ふと、恐ろしい考えがうかび、ブンブンとそれを振り払う。嫌だ、もし犯人が逃走中で時効にもなっていない事件だったら、関わりたくない。
「（明日香川さんに聞いてみよう）」

翌朝。校門の前に竹田が立って、登校してくる生徒にあいさつをしていた。毎朝の光景に俺も軽く頭を下げてやり過ごそうとすると呼び止められ、
「職員室の俺の机の上に鍵があるから、椅子の上に置いてある本、図書室に運んどいてくれ」
と用事を言いつけられた。頼んだぞ、とひらひら手を振る竹田に「はい」と笑顔で応じつつも内心面倒だと思う。自分で運べばいいのに。

教室にいったんかばんをおいて、職員室へと向かった。「失礼します」と言い入った瞬間、む、とコーヒーの匂いが鼻をつく。急いで竹田の席に行くと、そこには乱雑にプリントやテキストが積まれ飲みかけのコーヒーがおいてあった。確かに椅子の上には紙袋いっぱいに入った本があったが（かなり重そうだ）鍵の姿が見当たらない。物を動かしたら悪いとは思いつつも、机の上を片づけながら探すことにした。あの先生のことだ、誰かがやってやらないと際限なく散らかしてしまうのだろう。

「（奥さんも大変だな）」

奥さんに怒られている竹田を想像して、少しにやけた。

鍵はちらばった書類の下に隠れており（たしかに机の上だった）見つけるとすぐに片付けをほおりだし紙袋を持ち上げた。とたん、びり、と嫌な音がして紙袋の底が破れる。幸い中身は落ちなかったが、持ち方の変更を余儀なくされた俺はポケットに鍵の束を入れ、紙袋を底から持つことにした。

「（まじ人使い荒い先生だな）」

次会ったら、絶対に文句いってやる。

何人かの同級生とすれちがい図書室に到着すると、俺はドサリと紙袋を足元に下ろし、うんとのびをした。朝から重労働、御苦労さま自分。ポケットから鍵をとりだし鍵穴にさしこんで回すと、カチリと小気味よい音を立てる。さて、ではもう一度紙袋を持ち上げるかと腰をかがめたその時。

「（うわ、なんか傷ついてる）」

木製の扉の下のほうに、白く細長い傷が何本もついているのが目に入った。誰かが蹴ったか、いたずらでもしたのだろう。

「（本当、ぼろい学校）」

古いから、というのもあるがやはり一番の原因は生徒数の減少だろう。日本で少子化が進む中、私学生徒の人数もぐんと大きく減少したらしい。それで経営が苦しくなって、こんな所の修繕にまで手が回っていないのだ。

「（まあ、図書室なんて使う生徒少ねえよな）」
それなのにこの学校の図書室はけっこうな広さと貯蔵数を誇っている。それが良いのか悪いのかなんて、俺にはわからない。
足で扉を開け中に滑り込んだ。カウンターの上に紙袋をおき一息つくと、腕時計に目をやる。七時五十五分、まだ始礼まで十分に時間があった。俺は迷わず扉の内側から鍵をかけ、書庫へと向かう事にした。
「香川さん」
書庫に入り呼びかける。しかしいくら待っても返事はなく、じれったくなった俺は昨日棚の奥につっこんだ本を手に取り再び、
「香川さん、六角です」
と呼びかけた。が、やはり返事はない。
「（朝は出ないのか）」
まあ、幽霊だしな、と妙に納得をしてしまい、血の染みを軽く指でなぞると元の位置に本を戻した。
「（殺人事件の話、早く聞きたいのに）」
かかわりたくない、と思いつつもやはり少し気になって。しょうがない、放課後まで待つことにしよう。とぼとぼと廊下を歩いていると、突然後ろから肩を叩かれた。びっくりして振り返ると、
「おはよ、タカ」
そこには友達の晴太が笑顔で立っていて。
「おはよ」
挨拶を返すと、かれは笑って俺の手をつかみそのまま進行方向とは逆に進み始めた。
「おい、何だ？」
「ついてきて」
「えー、何処だよ」
「生物室。昨日放課後に蛙の解剖したんだけど、そん時に忘れ物したみたいでさ」
「それで俺は連行か」

今日はどうやら朝からついていない日らしい。嫌々ながらも観念して手を振りほどき晴太の横に並ぶと彼は笑い、
「流石、タカ」
えらいえらいと背中をたたかれる。
「まじめんどい。ありがたく思え」
ポケットに手をつっこみつつ無気力で言うと、
「はいはい、感謝感謝」
と軽く流された。この調子だから、こいつとは付き合いやすい。
階段を二つのぼり、廊下を歩くと手前からずらりと化学室、物理室そして生物室と理科系の教室が並ぶ。二人で奥まで進み、ガラリと木の扉をあけた。とたん視界に飛び込んでくる動物の標本。俺はこれを見るのが好きで、そそくさとそちらに向かった。蛇や蛙のホルマリン漬けに鳥の子宮での発達過程を追ったもの、白くなっている魚は管理が杜撰だったのだろう、びんの中の薬品がほとんど蒸発してしまっている。その横には人骨の標本がなぜか二つあり、その下には猫の骨格標本がペットのようにちょこんと並んでいた。
「なんかすごいよなー、こういうの」
いつの間にか横に晴太が並んでおり、その手には一本のシャーペンが握られていた。
「もしかして、忘れものって、それ？」
「そ。俺のお気に入り」
小さな傷が入っていて、全体的に黒ずんでいるそれはとても使いやすそうには見えない。
「さ、もう帰ろうぜ。ありがとな、付き合ってくれて」
「チロルチョコ一個よこせ」
冗談で手を突き出すと、晴太はそれをパチンとたたき「高いよ」と笑った。

「あはは、それは君、死んだ者にもルールはあるのさ」
放課後、今日は書庫以外の電気を消して、扉にしっかりと鍵もか

けた。これで先生が乱入してくることはないだろう。「おうい」「はい」と会話をはじめ、香川さんに朝の事を話すと彼は笑って（顔は勿論、姿は相変わらず見えていないが）そう言った。
「ルール？」
「そうだ。僕がこの本にとり憑く時、神様に決められたものだ」
ルールが云々より、神様って本当にいたんだ、とそちらに気をとられる。
「今日はその事も含めて話をしよう」
香川さんの声に頷き、俺は棚と棚の間に腰をおろす。今日は何にも邪魔されず、最後まで話を聞く覚悟でいた。
「僕が殺されたって、昨日言っただろう？」
「はい」
「まずそこにいたる経緯を聞かせようか。僕の母親は外国籍だったと言ったね」
「そう聞きました」
「彼女はその昔外国から日本へたくさんの知識人や宣教師たちがやってきた時代に、その中の一人としてここにやってきたんだ」
それはもしかして、開国後の話だろうか。江戸という閉鎖的時代からいきなり解き放たれた明治時代。外国からやってきた知識人や宣教師たちは各地に教会や学校を作った。その中の一つがわが高校、と入学式のときに切々と語られたっけ。
「その時にはお腹に僕もいてね、日本に着くとすぐに生んだらしい。それからしばらくは何事もなく暮らしてたけど、ある程度僕が育った時に僕と兄弟を残して母がなくなってしまったんだ。それから兄弟は散り散りになって、僕もこれからどうしようと路頭に迷っていた。そこを日本のある夫婦が引き取ってくれて、そこで育ったんだ。主人が学校の経営者で、僕も成長すると自然とそこへ出入りするようになってね。生徒にはかなり好かれていたと思うよ」
自慢気な声をだす香川さんに、やはり教師だったのかと一人納得する。

「でもある日ね、たしかよく晴れていた日だったと思う。校庭を散歩していたら、いきなり背後から殴りつけられたんだ。驚いたというか、自分の血が飛び散って凶器の本に付着した所を見た瞬間もう意識が途切れてね。気づいたら神様とご対面さ」

香川さんの声につられて、俺はまた血の染みの痕をなでていた。これが、人一人を殺した凶器。手の中にあるこの本が。気持ちが悪いだとか、触りたくないといった嫌悪感がなかった事が自分でも不思議だった。

「神様は僕に地上に戻りたいかと聞いた。僕はその時混乱していてね、何が何だかよくわからずに『はい』と答えたんだ。そしたら、目の前が真っ暗になってね、頭の中に声が響いた。お前に言語能力を与えるが、お前は最初に目が覚めた部屋でしか言葉を発する事が出来ない。しかもお前はある一定の刻限からしか声を発せないし、全ての者がお前の声を聞きとれるわけではない。もし地上に満足したら、お前の体をお探しなさい、そうしたら天の迎えがやってくるでしょうってね。それで目が覚めてみると、この本にとり憑いていたというわけさ」

「ああ、だから朝に話しかけても返事をしてくれなかったんですね」

「そのとおりだ。それから僕は僕を殺した犯人を確かめるつもりになった。しかしだね、本にとり憑いていちゃあ自分で動けないし、しかもこんな本誰も借りやしない。しかたなく声が出る時間に『おういい』と呼ぶが、誰も返事をかえしてはくれなかったんだ。しだいに、僕は犯人の事はどうでもよくなってきた。こんな状態じゃあ探せるものも探せないだろう？だからもうこの世から離れるために体を探そうと、その事を考え始めたのだ」

ふと、彼の話に違和感を覚えた。

「待って下さい、『おういい』に、誰も返事を返してくれなかったって」

「ああ、君は返してくれたね。はじめてだ」

「はじめて？」

おかしい。竹田がいたはずだ。
「俺の少し前に、返事を返してくれた人がいたはずなんですけど」
「本当かい？そのような輩は記憶にないが」
「香川さんの『おうい』にあわせて歌ってた人がいるはずなんですけどね」
「ああ、あの煩い奴か」
「ほら、やっぱり」
「あんなもの、返事ではないよ。返事と言えば『はい』だ。『おうい』ときたら『はい』だろう」
おそらく、目に見えていたのなら今頃香川さんはきっとツンと口を尖らせているのだろう。俺は彼の言葉に苦笑しかうかばなかった。返事を選ばなければ、もっと早く人と出会えていただろうに。
「話を戻すよ。体の事を考え始めると、不思議と体が近寄ってくるのが分かった」
「体が近寄ってくる？」
まさか。ホラーな予感がする。
「うん。どうやらこの近くに僕の体があるらしい。すぐそこにまで、月に三回やってくるんだ。いつも何かに阻まれて、再開する事は出来んがね」
瞬間、背筋が凍った。頭の中に、真っ青な顔をした外人が図書室の扉の前で、ぼうっと立っている姿がうかぶ。
「つ、月に三回って」
今日だったらどうしよう。今出て行って、扉の向こう側に立っていたらどうしよう。
「月の初めの三日間だよ」
「そうですか」
とたん、ふっと抜ける空気。今日は二十七日、大丈夫だ。
「それで、僕はもういい加減成仏したいのだよ」
外人の口から、しかもキリスト教学校で「成仏」という言葉が出たことに、違和感を覚えたが、それ以上に話の流れがあやしい方向

に向かっている事に対し頭の隅から危険信号が鳴り始めていた。
「六角君に出会ったのは、きっと神様からのお呼びがかかったのだろう」
「はあ」
「六角君」
「はい」
一瞬、本をなげて走り出したい衝動に駆られた。しかし、俺が実行に移すより先に香川さんは不吉な一言を発しており。
「頼む、僕の体を探してくれないか」
「・・・」
再び、死体が扉の前に立っている映像が脳裏をかすめた。嫌だ、怖い。全力で拒否したい。
「六角君」
すがるような声を出されても、嫌なものは嫌だ。外国人の体って大きいし、もし襲われたらきっと太刀打ちできない。立っているだけで十分に破壊力があるのに、立ち向かってきたら俺は正気を保てる自信がなかった。
「何故だまっているんだい」
確かに何年も何十年も人が来る事を待ち望んでいたのだろう。話からすると明治生まれだから、本当に長い間だ。
「六角君」
明治時代って、土葬だったのだろうか。日本人は火葬でも、外国人だから特別なはからいでって事で、土葬だったかもしれない。グロテスクなゾンビを想像して、いや無い、と首をふる。きっともう肉はきれいになくなっていて、あるとしても骨だけだろう・・・たぶん。次は骨が図書室の扉の前に立っている姿が思い浮かんだ。生身より怖くないかもしれない。
そこでふと、何故死体が近くにあるのか疑問を感じた。
「待って、何で死体が近くにあるんですか」
「あそこに葬られたと思っているがね。ほら、あそこだ」

「あそこ？」
「学校の裏に森があるだろう。そこに、この学校の創設者の墓がなかったかね」
香川さんの言葉に、ぴんと思いついた。確かに校舎の裏の森にひっそりと墓所がある。入学式の次の日に、クラス全員でそこにつれていかれ墓掃除をした。創設者が外国人だったため墓石は洋風で、誰かが「火葬ですか、土葬ですか」と引率の先生に聞いていたっけ。
「ありますね、なるほど」
確かにあそこからだったら、校内に侵入していてもおかしくない距離だ。
「なんなら、まずそこを確かめてくれるだけでも良い」
あそこなら、たぶん行っても怖いとは感じないだろう。数秒の間迷ったが、俺は意を決し、
「墓を確かめるぐらいなら」
とうなずいた。
「そりゃ、ありがたい！」
感情を表さないはずの本から、歓喜の様子がひしひしと伝わってくる。俺は微笑みながら、本の表紙をなでた。
「さあ、そうと決まれば六角君。今日はもう帰りなさい」
「はい、そうします。じゃあ、明日は学校がないから、月曜に」
「たのんだよ、ありがとう」
香川さんは本当にうれしそうに言うと、喜びをかみしめるかのように黙り込んでしまった。俺は本をまた棚の奥につっこんで書庫をでる。一瞬、扉の外に人骨が見えやしないかとびくついたが、それらしき影はなく、ほっと胸をなでおろし図書室をあとにした。

04

「タカー、もういいだろ？」
週があけた昼休み。やはり一人で行くのは躊躇われ、晴太をさそって墓へと出向くことにした。途中、道端に生えていた花（名前は知らないけど、この季節によく見かける）を二、三本つみとり、墓につくと墓前にそなえ、まずはお参りとしゃれこむ。墓は二つで、学校の創設者とその妻のものだった。洋風の墓石に英語で何か書いてある。
「うん、ちょっと待って」
もしかして、香川さんって創設者だったとか？ふとそう思い墓銘を見たが違っていた。熱心に墓を見ている俺の視界の隅に、晴太がぶらぶらとつまらなさそうにしているのが映る。
「おー、タカ、これ見ろよ」
と思ったら、軽く小突かれた。何だ、と彼を見ると「ほら」と墓所の隅を指差した。
「ｆｏｒ　ｃｒｅａｔｕｒｅｓだって。動物用の墓だ」
「何で動物用の墓があるんだ？」
首をかしげた俺に、晴太は、
「実験で使った蛙とか、そんなののための慰霊碑だろ」
とさも当然という風に答えた。
「ああ、なるほど」
「俺がこの前解剖した奴も、ここにまつられてるってワケか」
茶化すように笑う晴太を、無言でバシンと叩く。
「ちゃんと手、合わせろよ」
「なんだ、いやに道徳的な態度だな」
「蛙一匹でもちゃんと生きてるんだぞ」
「はいはい。本当、タカってそうゆう所きちんとしてるよな」
軽口をたたきながらも手を合わせる晴太に、俺は密かに笑いかけ

た。確かに命は尊いものだと思っているが、今はわけが違う。先週の香川さんの話から、何かに呪われるという話は本当にありうると分かったのだ。動物にだって、もしかしたら呪われるかもしれない。

晴太が「もういいだろ」と目を開けたので、教室に戻ることにした。午後一番の授業は英語、きっと睡魔におそわれるだろう。しかし、あそこに墓がなかったとなると、一体何処から死体はやってくるのだろうか。学校から一番近い墓場と言ったら、創設者の所を除いては少し遠くにしかない。校内ならまだしも、公共の道を死体が歩いていたらきっとかなり目立ってしまう。

「（もしかしたら、体の一部だけかもしれない）」

明治時代の死体が完全に残っているというのも怪しい話だ。アダムズ・ファミリーみたいに、手だけが図書室を訪問しているのかも。足だけ、というのもありうる。これだと暗闇の中で影に隠れつつ移動していたらきっと目につかないだろう。ちらりと見えても、猫か犬ぐらいにしか思わないだろうし・・・いや、犬はないかな。

とりあえず、墓はなかったと香川さんに報告しなければならない。

六時過ぎ、俺は書庫で香川さんのとり憑いた本をかかえ座り込んでいた。

「確かに来るんですよね？」

「ああ、来る。すぐ近くだ」

「近くって、具体的にどことは分かりませんか？」

「分らんよ。僕はここから動けないのだから」

「そうですか・・・」

死体が来るのは、図書室の扉の前ではないのかもしれない。よく考えれば、書庫の窓の外のほうが、距離的には近いのだ。

「うーん、どこにあるのかなあ」

「そこらへんに埋められてるとかは？」

「ありうるなあ。もしかしたらきちんとした墓は建ててもらってないかもしれん」

「何でですか？」
「だって、凶器が押収されずにここにあるのだよ？それなら、死体は隠されてしまって事件は隠蔽された可能性が高い」
「そんな」
もしそうだったら骨が見つかりでもすると大問題になる。きっと新聞ぐらいには載るだろうな。でも、きっともう犯人も亡くなっている。
「・・・香川さん」
突然ふと、俺は妙案を思い付いた。何故、今まで思いつかなかったのだろう。
「もしかしたら体、ここに呼び寄せられるかもしれません」
「何！？本当か？」
「あくまで、もしかしたらですけど」
月の初めの三日の内のどの日かに、図書室の鍵という鍵を全て開けておけばよいのだ。そうすればきっと、体は香川さんに会えるはず。
「もし体がここに来れない理由が、鍵がかかってるからだったらの話ですけどね」
「おお、それは名案だ！」
「今日は三十日だから、明日体は来るはずですよね」
「そうだ、一、二、三日に来る」
「なら明日、俺が帰りに鍵をあけておきます」
それで解決するなら万万歳だ。話している内にだんだんと絶対に上手くいくような気がしてきた。それは香川さんも同じようで、
「そうなったら、君とお別れになるかもなあ」
としみじみと言う。
「ああ、でも上手くいかなかったらどうしようか」
「大丈夫ですよ、きっと」
「そうかな」
「ええ」

ポンポンと軽く本の表紙をたたくと彼は安心したのかいつもの調子を取り戻し、
「では、明日はぜひ頼んだよ、六角君。さあ、今日はもう帰りなさい」
と気取って言った。
「はい、それではさようなら」
俺も挨拶すると、また本棚の奥に本をつっこんだ。制服についた埃を払いながら書庫から出ると、いつもの通りに戸締りをして図書室から出て行った。

「怪談？」
二月一日。昨日香川さんと約束したとおり、俺は図書室の鍵という鍵を全てあけてきた。香川さんに別れを告げ（彼は別れ所ではなく、早く体に会いたいといった様子だった）図書室を出ると、ちょうど部活帰りの晴太に出くわし、只今一緒に帰宅中だ。
「そ。うちの学校の、なんか聞いたことある？」
事件から解放された気楽さからか、俺は晴太にそんな事を聞いていた。もし香川さんが原因のものがあれば面白いと思ったのだ。晴太は少し考えたあと、ああとうなずく。
「そう言えば、先輩が前何か言ってた気がする」
「何て？」
「えーっとな、たしか・・・ああ、何か夜中に廊下からコツコツいう音が聞こえるとかなんとか」
「コツコツ？」
もしかしたら、それは香川さんの体のことだろうか。
「なんでも人の足音じゃないそうだ」
頭にぱっと、手の骨が廊下を疾走する映像がうかんだ。やっぱり香川さんの体は上から下まで完全にあるわけではないのかもしれない。
「でも、急にどうしたよ。タカ、そんな話好きだっけ？」

「ううん、ちょっと思いついただけ」
「・・・もしかして、話聞いた、とか？」
急に晴太が声のトーンを落とした。
「は？何の事だ？」
「とぼけるなよ。なんだ、知られちゃってたか」
ぺろりと舌を出した晴太を見つめ、俺は首をかしげた。
「何の事？」
「だから、知らないふりはいいって。じゃあ三日の夜、七時教室集合な」
「は？」
「いやさ、本当はドッキリでお前引き入れようとしたんだけどなあ。まさかばれるとは」
まあいいか、と欠伸をする晴太に、俺は全くついていけてなかった。三日の夜に、七時に、教室？
「ちょっと待って晴太」
「うん？夜メシは持参な」
「いや、待って。何の話？」
「は？四人で夜集まって泊まりで肝試ししようって・・・まさか、お前」
「知らないよ」
はあ、と溜息をつく。そんな話、全く知らなかった。最近は香川さんの事で何かと気を取られていたのだ。他の事に気がまわるわけがない。
「あー、やっちまった？俺」
パシンと右手で頭をたたき、晴太が顔をしかめる。
「やっちまったよ。全然知らなかったよ、そんな計画」
勘違いと早とちりは晴太の悪い癖だ。
「で、何だって？肝試し？」
とりあえず全て吐かせてしまえと先を促すと彼は頷いて、彼らのたてていた計画とやらを語りだした。

「はじめは俺と明で学校泊まってみてーみたいな話してて、夜いてもばれなさそうな所を挙げていってたらさあ、出来るんじゃね？ってなって。それで我らが大将の大島京介君に話を持ちかけてみたのですよ。したら、案の定のってくれて、それなら肝試しもしようぜって事になり、タカはドッキリで呼ぼうって事になり」
「まてよ、何でそこで俺はドッキリで呼ぶことになるんだ？」
「えー、だって敬英君真面目っ子だから普通に誘っても参加しないと思って。俺たちなりの配慮ってやつ？」
あはは、と笑う晴太に俺は力なく笑い返した。よかった、事前に知れて。晴太と明、そして京介の三人が集まったらろくな事はない。個人単位だとけして悪ガキではないのだが、集まればただちに学年随一のトラブルメーカーとなってしまうのだ。そして、いつもそれに巻き込まれてしまう、俺。何を気に入られているのか知らないが、悪事を働く時は必ず「敬英も」という事になる。
「配慮の仕方、間違ってるよ」
あきれたを通り越して、溜息もでない。
「で、参加するだろ？」
そんな俺の様子に気づいていないのか、ケロリと晴太は誘いをかける。
「しないよ」
「なんで！？」
「なんででも」
夜の学校だなんて、怖くてとても泊まれたものではない、と思う。それに先生に見つかったら面倒だ。
「ふん、どうせタカはそう言うと思ってたさ」
「予想がつくならあきらめろよ、馬鹿」
「馬鹿じゃないぞ。こうなることを予想して、プランＢがある！」
どうだ、と自慢気に鼻を鳴らす晴太に、今度は何のリアクションもとれなかった。
「俺にばれる事前提かよ・・・」

そのぐらい、あきれてしまったのだ。
結局逃げられないと悟った俺はちゃんと参加すると晴太に約束した。何も準備のない状態でつかまるより良いと思ったのだ。晴太は俺の約束にご機嫌になったらしく、街灯に照らし出された横顔にはにこにことずっと笑みがうかんでいた。

05

「（生物室行って、美術室行って・・・音楽室も定番だよな）」
三十分前、部活に行ったはずの晴太と明が（二人とも同じ部だ）がいきなり図書室に乗り込んできて、俺に一枚ペラリとノートの切れ端を与えて去っていった。何も言わなかったので、変に思い渡された紙を見ると上のほうにきれいな字で「肝試しのルート考えろ！」と書いてあり、その下にずいぶんと汚い字で「これは明日の朝京介に提出」とあった。
「（あと礼拝堂とか？あー、でも俺あそこは本気で怖いしな）」
運動場をはさんで校舎と向かい合うようにして建っている礼拝堂の闇夜にひっそりとたたずむ姿を思い浮かべて、一人ぞっとする。あそこは日の高いうちでも、一人で入っていくのははばかられる場所だ。
この際あえて自分の事は考えずに最恐コースをつくるか、とぼんやり考えているとふと目の端に時計が映った。時刻は五時五十八分、そろそろ閉館だ。カウンターから立ち上がり、図書室内を見回す。たしか、今日はもう生徒がいなかったはずだ。
「そろそろ閉館です」
念のために声をかけたが、棚の間から生徒の出てくる気配はない。
「（先月だったらそろそろ『おうい』がくるな）」
そう言えば、結局香川さんの体はどんなものだったのだろうか。もし俺が香川さんと出会わなければ、肝試しで俺たち四人は本物のおばけを見たかもしれない。図書室の扉の前に立っている、人骨のどの部分かを。
「（あ、俺本物に会ってんじゃん）」
肝試しを怖い怖いと思っていたが、気づけば俺は香川さんという本物の幽霊に出会っているのだ。そう思えば、怖くないような気もする。

「（でも姿は見てないんだよね。実体があったらもっと怖いかな）」
香川さんが幽霊だと知った時、俺は怖くて怖くてしょうがなかった。竹田のお遊びのお陰で救われたものの、あれがなければたぶん今でも怖がっていたはずだ。
「（いくら本物に出会ってても、他の奴が出てきたら怖いかな、結局）」
はあ、とため息をついた。本当、あの三人にかなり振り回されている気がする。なんだか明日の事を思うと急に疲れがでてきて椅子に座りこもうとした、その時であった。
「おうい」
一言。聞きなれた声が、図書室中に響き渡った。
「（香川さん？）」
いや、そんなはずはない。彼は昨日、体と再会して成仏したはずなのだ。きっと空耳だ、そう思い帰り支度をはじめると、
「おうい」
確かに、聞こえた。俺は一回椅子に座りなおし、そして目をつむった。もう一度、確かに聞きとれれば返事をしよう。カウンターの上に先生が置いていった鍵の束を握りしめ、俺は三度目の「おうい」を待った。
「おうい」
「はい」
来た、そう思った時には声を張り上げていた。飛び上るようにして椅子から立ち上がり、書庫へと向かう。
「六角君、失敗だ！」
俺が書庫に入る前に、たまらなかったのか香川さんはそう叫んだ。
「体が来なかったんですか？」
あせって書庫の鍵を開け、中に滑り込むと俺はすぐに香川さんのとり憑いている本を手にとる。昨日の放課後、わかりやすいようにと入ってすぐ目にとまる場所に位置を変えておいたのだ。
「いや、体は来た。来たが、入ってこなかった」

「入ってこなかった？」
おかしい。鍵は全て開けておいたはずだし、朝登校して一番にすべての鍵を閉めにここに来たのだ。誰か他人が夜中に閉めた可能性は無い。
「扉を開ける事が出来なかった？」
図書室の扉は少し重みがあり開閉には力がいる。窓にしても手をどこかの突起にひっかけて、横に押さなければならない。つまり、鍵は開いていても、その二つを開ける力、または能力がなかったと考えられる。
「おそらく体は窓ではなくこの部屋の外側の扉あたりにいたと思う」
気配が遠かった、と香川さんがつぶやいた。
「他に何か、気づいた事はありませんか？」
骨の一部だったら、扉や窓を開ける事はきっとできない。やはり、手だけ、とか足だけ、が正解だったのか。
「うん、何かカリカリという音が聞こえたよ」
「カリカリ？」
「何だろうな、爪で木を引っ掻くような音だ」
香川さんの意外な言葉に、俺はますます頭をひねった。カリカリという爪で木を引っ掻くような音・・・
「・・・あ」
ふと頭の中に、あるイメージがうかびあがった。扉を開けることができなくて、学校の近くにいて、夜中に歩き回ってもけして目立つことのない存在。
「ああ」
気づけばするすると謎が解けてきた。
「香川さん」
「なんだね」
「あなたは神様に言語能力を与えられたんですよね？」
「そうだよ」
やはり。たぶん、俺の考えはあっている。

「香川さん」
「うん？」
「明日、俺が体を連れてきてあげます」
「本当かい！？」
「ええ、楽しみに待っておいてください」
俺はにっこりと本に笑みを向けた。あとは明日、答え合わせをするだけだ。

「それじゃあ、ルートは五階の中教室からはじめて各教室をまわった後にこの教室に戻ってくるという案でいくぞ」
夜の九時をすぎて、やっと職員室の明かりが消え、俺たち四人は懐中電灯を片手に学校の地図を広げていた。明が見つけてきた教室は窓もなく、四人が泊まるには十分な広さのある物置状態の部屋だった。学校の最上階にあり、警備員がまわってくる事も無いらしい。放課後にジャージ姿で集まった俺たちは、教室を掃除してメシを食った。生徒のほとんどが下校する時間を見計らい、茶道部の部屋に置いてあるという噂だった布団（未確認情報だったが、行ったら本当にあった）を失敬し、教室に急いで運び込むと、結構な快適空間へと様変わりした。
「特別教室の鍵はいつも空いてるから良いとして、本日は肝試しのために我らが六角敬英君が唯一施錠している図書室の鍵を開けておいてくださった、拍手！」
パチパチと盛大な拍手が巻き起こる。俺は片手を肩の高さにあげ、軽くお辞儀をしてみせた。
「さらにこの会を後援してくださった大島京介君のご両親に感謝！」
今日学校に泊まるという事は、親にはもちろん秘密である。だからみんな、今日は一応京介の家に泊まっているという事になっていた。京介の両親はと言うと、両親とも学生時代にこの「合宿」をやった事があるそうで喜んで息子にも「やれ」とゴーサインをだしたらしい。変わった家もあるものだ。

「各教室に行った証拠として、その教室の中にある物をとってくる事！制限時間は一人三十分でかかった時間が一番短かった人が勝ちで長かった人が負けな」
「罰ゲームは？」
「明日の昼に売店のパン一個おごる」
「いいぜ、じゃあ誰から行く？」
黙っているうちに話はどんどん決まっていく。もう香川さんの体は図書室の扉の前にいるだろうか。
「俺行くよ」
なんとなく、いるような気がした。
「まじかよ、タカ」
「勇気あるぅ」
「早く終わらせたいだけだよ。最速で戻ってくる」
「お、勝利宣言ですか！んじゃ、扉出る所からストップウォッチかけるぞ」
京介が布団の上に寝そべり、うきうきとストップウォッチを手にとる。俺はうなずき、扉に手をかけると、
「それじゃ、行ってきまーす」
と真っ暗な廊下に一歩踏み出した。後ろ手に扉を閉めると、すぐさま走り出す。目指すは生物室、そして図書室だ。あらかじめルールを予測しておいた俺は図書室に特別教室の数と同じ本数のチョークを用意していた。香川さんの事で時間をとられても、それを持ち帰れば全ての教室をまわる必要はない。ポケットの中に入れている懐中電灯は廊下ではつけない事にしていた。もしつけて巡回中の警備員にでも見つかったら大変だ。下りなれた歩幅の階段を小走りで過ぎていく。生物室は二階下だ。
細心の注意を払い、無事につまずくことなく月明かりに照らしだされた廊下に到着した。生物室は一番奥、角を曲がると俺はすぐに懐中電灯を握りしめ、いつでも点灯できるようにスタンバイする。
「（お願いだ、あっていてくれよ）」

ガラリと生物室の扉をあけ、ぱっと懐中電灯を点けた。とたん、照らしだされるホルマリン漬けの標本たち。さすが、夜見るのと昼見るのとでは迫力が格段に違う。懐中電灯の光を反射したそれは、かなり不気味な光景だった。進みたがらない足を無理やり動かし、教室内へと入り込むと真っ先にホルマリン漬けを通り過ぎ、人骨の標本が入っている棚を見た。

「（やっぱり）」

俺は予想通りの状態に思わずにやりと笑みをうかべた。棚の戸は少し開いており、二つの人骨標本の下、この前見た時には確かにあった猫の骨格標本がなくなっている。

ずっと人間だと思っていたが、香川さんは猫だったのだ。

俺は懐中電灯を消し、一目散に駈け出した。向かうは図書室、香川さんとその体をひきあわせてやらなければならない。

香川さんは明治時代に、人間と一緒に大陸から渡ってきたのだろう。恐らく、誰かのペットか、日本で売られるためにつれてこられた。どちらにしろ、母親猫が脱走を図り、野良になった所で香川さんが生まれた。やがて母親が死に、まだ子猫で生きる術を知らなかった彼は運良く「香川さん」に拾われたのだ。学校の経営者だった「香川さん」はキリスト教徒だったのだろう。香川ルカ、変な名だと思ったが、聖書の中の「ルカによる福音書」のルカからとったものだったのだ。学校内に自由に出入りできたのも、猫だから、生徒に人気があるのも猫だから、殺されても大騒ぎにならなかったのは猫だったから。何の恨みを買ったかは知らないが、生徒に本で殴られたのだ。そして骨は標本となり、魂は本に宿った。きっと本は、殴った生徒が書庫に投げ入れたのだろう。

足音を殺して図書室付近までやってくると、かすかにカリカリと木を爪で引っ掻く音が聞こえてきた。図書室の扉の傷、あれは香川さんの体が中に入りたくて一晩中引っ掻いた痕だったのだ。

「ルカ」

一声、闇の中から呼びかけると、カリカリという音がやみ、コツ

コツと二、三歩動いた音がした。明かりはなかったが、かまわず進む。
「ルカ、おいで」
扉の前にたどりつき、俺はその場にしゃがみこんだ。とたん、膝の上にかたいものが乗ってくる。
骨だ。
「今つれてってやるからな」
なでてやろうにも毛並みがないので、優しく話かけ、抱きかかえて立ち上がった。香川ルカは抵抗せずに、おとなしく腕の中におさまっている。左手で触れている骨はひやりとしていた。
重さのある扉を片手で押し開け、懐中電灯をとりだした。窓から月明かりがさしこんでいたが、書庫の中は真っ暗だろう。
「おうい」
「はい、今来ました香川さん」
書庫の鍵も、放課後に開けておいた。体を軽く押し当てると扉は開き、隙間ができた瞬間、腕の中から体が飛び出す。コツ、という音が響き、次にバサリと本の落ちる音がした。
「香川さん？」
今落ちたのは、香川さんのとり憑いた本だろうか。
「大丈夫ですか？」
なんとなく明かりをともすのがはばかられ、懐中電灯を持っていた手を下におろした。そのまま目の前の暗闇を凝視する。
しばらくの間、何の音も動きもなかった。ただ何かにとり憑かれたかのようにその場に立ちすくみ、じっと次の気配を待っていたのだ。何か、起こらないのか。とても長い間、そうしていたように感じた。
「ニャーオ」
突然、静寂をやぶり甘えたような甲高い声がした、と思うと足元にふさふさとしたものがまとわりつき、
「ニー」

二言目と同時に、ふとそれは走り去ってしまった。

06

「一八九七年四月に香川氏は一匹の黒猫を拾った。どうやらそれは外来種であるらしく、汚れていた毛並みは夫人が洗うとすぐに艶を取り戻し、それはかわいらしい猫だったという。香川氏が家を出ると必ず付いてきて、学校内にも自由に出入りするようになった。嫌うものもいたが、その愛くるしい姿から生徒は『ルカ』と名前をつけかわいがっていた。しかし一年後、この猫は学校内の森の中で血を流して死んでいるのが発見される。おそらく殺されたのだという話になったが犯人はつかまらぬまま（香川氏が積極的に犯人探しを行わなかったため）わが校内の礼拝堂にてルカの追悼式が生徒たちの手によって開かれた。香川氏の悲しみも相当なものだったらしく、肩を落として帰宅する姿がたびたび見受けられたという。そんな彼をみかねて、当時生物教師として本校にいらっしゃったアメリカ人のジョン・アーノルド氏がルカを剥製か骨格標本にする事を提案し、香川氏は骨格標本にすれば生徒の学習のためにもなるだろうと決意した。現在生物教室においてある猫の骨格標本がこれである」

一週間後、俺はやっと香川ルカに関する記述を図書室で見つけた。学校の創立五十周年を記念した古い冊子の中に小さな記事が載っていたのだ。

あの夜、香川さんが消え去りしばらくして、俺は三人のいる教室へと戻った。記録は十八分二十七秒でおしくも十三分四十三秒という驚異的な記録をはじきたした明に負けてしまったが、後に彼が反則したことが発覚、そのため俺が繰り上げ一位となった。親にも先生にもばれずに一夜を過ごした俺達四人は朝練の生徒たちが登校してくる前に布団を戻し、朝飯を食べ、何食わぬ顔で教室に入り笑顔でクラスメイトをむかえた。朝からこの四人がそろっているという事に、かなり不審な顔をされたのだが。

二日たち、生物教室の猫の骨格標本が消えたという噂が流れ始め

た。授業ついでに確認しに行くと、確かにいなくなっており、生徒も先生も「あんなものを盗んでどうするのだろう」と一様に首をかしげている。ただ一人、俺を除いては。
「なあ、もういいだろ？帰ろうぜー？」
晴太が俺の横で腕をぐるんとふり、本日三回目の言葉を吐いた。
「だーめ、晴太もちゃんと手ぇ合わせろよ」
放課後、夕暮れの中急に創設者の墓の事を思い出し、俺は晴太の制服を引っ張りそのまま走り出していた。「急にどうした」とか「どこ行くんだ」とかいう叫び声を無視して墓地まで走りとおし、オレンジ色の大気の中に浮かびあがった石碑を見た瞬間、なんとなく安心してしまい笑顔で振り向くと、
「変な奴」
と晴太があきれた、という表情をうかべていた。
「まだあの蛙ひきずってんの？きっともう成仏したって」
ぶつぶつと文句を言いつつも彼はきちんと手を合わせる。それを横目で見て笑い、俺はしゃがんでｆｏｒ　ｃｒｅａｔｕｒｅｓの文字を指でなぞってみた。
「晴太、知ってる？」
「何を？」
「この石碑はね、もともと一匹の猫が死んだから作られたんだって」
「へー、じゃあそれ猫の墓なのか？」
「ううん、死体を埋めなかったから、こんな墓銘にしたんだってよ」
「死体を埋めなかった？じゃあ、どうしたんだよ」
眉をひそめた晴太を振り返り、にやりと笑う。ここで一つ、新たな怪談をつくってやろう。
「この前消えた生物室の猫の骨格標本」
「・・・まさか」
「あれ、本物だったんだって」
石碑から手を放し立ち上がると、俺は校舎のほうへと歩き出した。
「消えたのって、もしかしたら」

晴太がいつもよりややか細い声を発したので、思わず微笑んでしまう。
「そうだね、今頃校舎の中を徘徊してるかもね」
吹き出しそうになりながら背中を丸めて走り出すと、夕日にのびた黒い影が一瞬だけ猫のように見えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9675p/

おうい

2011年1月5日19時25分発行